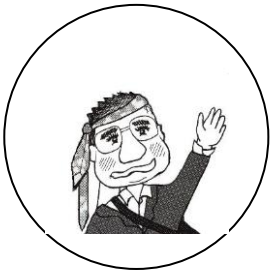
インド大魔王のエッセイ　　２０２５年元旦号

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話
発行：トラベル・ミトラ・ジャパン　　ぽん子画
（530-0041）大阪市北区天神橋 1-18-25　第 3 マツイ・ビル 201　ＴＥＬ：06-6354-3011
お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。（E-mail：daimao@travelmitra.jp）

霧が覆い隠すシッキム王国の〝神秘〟（3）

M教授のコメントでわが輩の憤慨度はトーン・ダウンしたが、一度だけＡ先生のご尊顔を拝したことがある。福井大学で某学会（20 数年前）が催されたとき、彼は颯爽と講義室に入ってきた。マスコミなどで注目度が高く誰もがざわめいた。最前列に座るかと思いきや、なんとわが輩の前に座った。そのときは「なかなかのハンサム」だと印象づけられた。頭脳のでき、ご尊顔ともわが輩などとても敵うものではない。わが輩の安もののブレザーに比べて、高価そうな上着をはおっていた。

久しぶりにお会いしたＡ先生にあの頃の面影はなく、髭をはやした痩身の道教の仙人のように見えた。いつのまにか、科学者から教祖に転向してしまったのだろうか。今は、頭脳は別とするが、わが輩の方が若々しくあると自負してもよい。わが輩にはまだまだ大きな夢がある。それなのに、まだこのようなことを続けておられることを残念に思った。

このグループは三十人程の団体だとＪ女史は言った。いつもは五十名程が加わるという。「今回はホーマ（護摩供養）の寄付金が高かったので少なくなった」という。「いくらですか？」と問うとＪ女史が口ごもった。「次回までに貯めて、今度は参加するという人がいる」とＧ君が口をはさんだ。「どこで儀式をするのですか？」

バンガロール（南インド）の郊外の村だと言ったが、彼は地名も、どこに行くのかも答えられなかった。観光ならいざ知らず、そもそも何のためにホーマ儀礼するか。

ここからはわが輩の推測なので、間違いがあるかもしれない。そのときはご容赦を。

いわゆる「カルマ落し」、「因縁落し」ではないだろうか。つまり前世の因縁でさまざまな現象が顕れた。それを金欲のインド人祭司が請け負うことになる。数十基のホーマ台に火焔がのぼると、とにかく迫力があるので圧倒されてしまう。

わが輩の旧知の悩めるヨガ教師も、ホーマの炎で厄除けをしてきたと言った。それですっきりしたと言う。すごく純朴な教師でサイババの写真から自然に灰が湧き出て来たと信じていた。「大魔王よ。なんと不思議なことか！」というので、心中「不思議なのはあなたの心のハタラキだよ」と思ったが、「そうですか・・・」と黙って聞いていた。カルマ落しなら高野山に行けばよかったのに、と言いたかったが、自由選択なのでご自由に、と口を閉ざした。

『アガスティアの葉』には、前世と来世が記されているという。Ｊ女史の前世は、現世と同じよう

な職種であった、と聞いたように記憶している。インド人が古代語の貝葉（紙の代用の葉）を読み解き（リーディング）、それを英語で語り、A先生が通訳するらしい。古代タミル語、いや現代タミル語でさえも読み解ける日本人は稀有である。古代の前世、誰も知り得ぬ来世など確かめようがない。それでも信じたいのが悩みある人間の悲しい性である。

わが輩の懇意のアジア文化研究所長（マドラス 1982 年）が事もなげに言った。

「大魔王よ。いろいろ聞き取って、後日に貝葉に鉄筆で書いて薬品で焼き古くみせるのが手口だよ」

ちなみに所長は、タミル語、サンスクリット語に精通している研究者である。

わが輩は、それだけでは満足できなく、パドマナバンさんに調査を依頼した。彼は元銀行家で、親日家である。わが家に泊ったこともある。ご先祖は南イドの聖地ティルマラで整骨医であったという。彼の息子は現代医学の医者になった。彼のモットーは「ダウト・シンク・アクション」である。何ごとも、疑い、考え、行動を起こせ、である。わが輩の最も信頼している人物であった。

それで判明したことは、A先生が書いた小説『アガスティアの葉』の場所は山の中などではなく、マドラス市（現チェンナイ）に近郊であった。ところが思わぬ手紙が届いた。

「大魔王よ。リーディングが当たったよ！」

どうやら親の名前が当たったらしい。なるほど、理智的なインド人をだませるなら、日本人を信じ込ませるなど赤子の手をひねるようなものだ。A先生ものせられたのだろうか。

大阪市で南インド・レストランを営業していたタミル人がやってきた。開店にあたってリーディングしてもらったら、最良の場所だと言われた。それで決心した。ところが数年で閉店になった。そのタミル人が 2 年程前にやってきて、「大魔王よ。一緒にアガスティアの葉をやらないか。レストランより儲かるぜ」と誘われた。そして、ナディ・リーダー（読み解き人）を連れて来た。まだ若いタミル人であった。せっかく日本に来たのだから正業について日本人妻を養ってほしいと思った。

古代のことは調べようがないが、近い過去未来ならチェックできる。

ネットの不確定情報だが、A先生の 30 年程前の読み解きは「生涯の伴侶であり、一男一女をもうけるはずだった」そうだ。ところがすぐに離婚したらしい。読み解きがはずれたというわけだが、小説のネタなので詮無いことである。それよりも、わが輩はA先生の右薬指の指輪が気になった。普通は独身なら指輪はしない。結婚なら左にするものじゃないの。最もこれも余計なことだけどー。

だから、アガスティアの葉など、町角の易者と同じで「当たるも八卦当たらぬも八卦」だと心にとどめておくとよい。本気にならず、お笑いのネタ程度に構えるのがよい。バカ高い見料など必要ないと思うけど、ご勝手に。

さて、残るはサイババの奇跡だ。

この調子で書き続けていくと、いつまでたっても本題の「シッキム王国」に至らない。そこでサイババに関しては別稿で明らかにすることにしたい。

結論だけを述べておこう。

「わが輩は、サイババのトリックを見てしまった唯一の日本人である」

見破ったのではなく、偶然見てしまったのである。